
犬とわたしの寝物語

ぶんぶんぶん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬とわたしの寝物語

【Nコード】

N5803P

【作者名】

ぶんぶんぶん

【あらすじ】

ある日、一人の少女があやまって森の奥深くに入り込んだ。

誰も心配する者はいないから、森で一人で夜を過ごしてもかまわない。

そんなことを言う少女を諭す声が一つ…。

木の実がつないだ寝物語 1

一人には慣れていた。

もちろん自分はまだ成人していないので、完全な独り暮らしとかいうわけじゃない。

いつも飛びまわっているけどしょっちゅう旅先から長い手紙を書いて送ってくる父さんがいるし、その父さんは数カ月には一度は帰ってくる。このまえば研究先でもらったという謎の木の実や果物を大量に置いて行った。

それに、かなり昔に建てられたという我が家は、がたついてはいるがかなりの広さがあり、その書庫には大量の書物がある。わたしは外で友人と遊びまわるよりも、自宅で古びた本をめくるのが好きだったくらいなので、一人のときに時間をつぶす手段に困ったことはない。

けれどその弊害か、あまり口がうまくない、かわいげがないといわれてしまうが、とくにそれで具体的に困ったこともなかったから放っておいた。

しかし隣町には、死んだ母さんの妹で、大きな商家に嫁いだシェリーさんと、その旦那さんのティムさんと10歳になるいとこのフィーもいるのだ。シェリーさんたちは彼女の実家でもあるこの家にたびたび遊びに来てくれて、手作りの料理を置いて行ってくれている。たまにはわたしが向こうのうちに食事をごちそうになることもある。

でもそれ以外はたいてい自分のことは自分でこなしているのだ。あの時期から父さんが忙しくなって、一人で家にいるようになって、はじめは何をすればよいかわからなかったのが今ではうそのようだ。わたしが街で評判のしっかりした子になるのは必然だろう。今では自宅に一人でいるのをなんとも思わなくなった。

あまり家の中に他人に入ってほしくはないから、掃除とか料理とかの家事はできるだけ自分でするようにしている。8歳になる前から3年間続けたいまではなかなかの腕前だと自分では思っている。

しかし、広すぎる庭の世話までは一人ではなかなか手が回らず、街の植木屋さんに頼もうかと最近おmoiはじめた。

なぜかすごく雑然とした庭なのだ。木肌がすべすべした綺麗な立木がたくさんあったかと思えば、私の腰くらいの高さで切られた太い切り株があったりする。ほかにもほぼ枯れ果てた花壇があったり、草ぼうぼうの一面からは放置された大きめの机と何脚かの椅子を発見したりもした。

「自分で何とかするとしても、よその人に頼むにしても、まずは全体の状況を把握することが先決ですね。」

今日は時間もあったから、一日中それに時間を費やしたって構わないだろう。何か新しい発見があるかもしれない。そう思って、わたしは今まであまり踏み入れたことのない奥のほうにまで意気こんで入って行ったのだ。

歩いて行くうちに、周りにだんだんとあまり見慣れない木や花が増えていくことに気付いた。

自分はよく図鑑も見ているし、近所の山に出かけてもいるから、このあたりの植物は知った気になっていたが、自惚れだったようだ。

家に帰ったら早速名前を確かめねば。

いくつか花をもってかえろうだろうか。

ああだけれど近頃家の中の植物度が大きいからな。

つつい増えちゃうんだよな。

でもこの花なんかすごく珍しそうだしなあ：

いろいろと考え事をしながら歩いていたところ、目の前にふわふわしたものが飛び出てきた。

これは見たことがある。シマリスだろう。茶色のアーモンドのような瞳と目が合ってしまった。

相手も、自分が飛び出た先に人がいるとは思えなかったのだろう。

着地した姿勢のまま固まっている。

私には小動物の表情を読む技術は残念ながら備わっていないはずだが、心なしかそのリスは驚いたように見えた。

「おや、まさか本当に庭の奥で何か発見できるとは思いませんでした。うん、大きな尻尾がなかなか愛らしいですね。あなたを持ち帰りしてはいけないうか。」

家にはたくさん木の実があるんです、きっとあなたの口にも合う

と思うのですが。」

しかしその思いとは裏腹に、そのリスは私から視線をそらさぬまま、じりじりと後退し始めた。

なかなか器用らしい。

体と同じくらいの大きさの尻尾は、その動きに合わせてふさふさと揺れている。

おそらく私を警戒しているのだろう。

いきなり現れた人間に警戒心を持つのはいいことだ。

下手に信用してはどんな目に逢うかわからないからな。

もしこの子が人の子だったら、その可愛さに目をつけられて危ない目にあうかもしれない。

む？もし人の子ならさっきの私の発言もなかなか危ないな。

また余計なことをつらつら考えているうちに、リスは姿を消してしまっていた。

残念には思ったが、私はおやつにともってきていた木の実を消えたあたりにおいて、また奥のほうに進み始めた。

騒がせた詫びのつもりだったが、あの子は気付いてくれるだろうか。

木の実がつかないだ寝物語 2

先ほどのリスに未練を感じながらも、わたしは奥のほうに足を進めていった。

途中でちょうどよさげな木陰を見つけたので、そこで持ってきたお昼を食べた。ライ麦パンのサンドイッチだ。中には卵に鶏肉のソテー、レタスにトマトを挟んでいる。ただし一つしかおなかに入らなかった。父の土産の果物で喉を潤した後は、食べきれなかったものをゆつくりとバスケットにしまい、再び奥に分け入った。来た方向も気にせずに、ただただ進んだ。

出発してから何時間たったのだろうか、はっきりした方角は不明だが、家からかなり離れたところまで来ている気がする。

こんなに庭は広かったのだろうか？ 周りの景色はもう森といってもおかしくないほどの威圧感である。

しかし、進むたびに初めて見る草花があるので、帰る気にはならなかった。

まあ帰る道が既に分からなくもあったのだが。

そのうちそちらに夢中になって、足もとばかり見ながら歩くようになっていた。しまいには地面にしゃがみ込んで、目に入った花に触れ手触りを確かめたり、顔を近づけて、香りを楽しながら好き勝手に動き回っていた。

そのとき、目の前のこんもりとした茂みの奥に何か動くものを見た。

それまでの高揚した気持ちのまま、向こうに顔を突っ込んでみた。

私が顔をのぞかせた先には、腹ばいになって前足で木の実をもてあそぶ大きな黒い犬がいた。

その木の実に見覚えがある気がしたのもっとよく見えないかと思わずかがもうとした時、顔の近くの枝がはでに折れてしまった。それに気付いたのか、件の犬はかたまってこちらを見つめている。

私が今までこんなに近くで見た犬は、ティムさんのお店の番犬の3匹のドーベルマンくらいなものだが、彼らはつねに4本の足で地面を踏みしめ、いつでも飛びかかる準備は万全だとも言うように、近づく人間を凛々しく見やっていたものだ。

だから、彼らよりもひとまわりもふたまわりも大きな体をもちながらも、べたりと体を横たえ、おもちゃでじやれるような姿でいたこの犬につい目を丸くしてしまった。

決して、その犬に呆れたとかそんなことはないのだ。

それはもちろん、犬だからといって、体が大きくて立派だからといってそんなことをしてはいけないうんて決まりはどこにもないのだからね！

私は急いで驚いた表情を取り繕って、茂みから顔をひきぬくと、回り込んでその犬をもっと間近で見ようとした。

近くで見たその犬はサラサラの長毛にピンとたった耳、いまは元気がないがさっきまでは左右にゆらゆら揺れていた立派な尻尾を持っていた。瞳の色は先ほどの記憶ではこげ茶だったと思う。

今は私から顔をそむけてしまっているが、目はちらちらとこちらを窺うようにしているところは、おおきん体には違和感があるがかわいいと思ってしまった。

その前足には変わらず木の実が握られている。

やはりそれは父が土産にと置いて行ったあの木の実である。

図鑑で調べたところ、あれは父の旅先でしか取れない珍しいもののことなので、この森に自生していたわけではないだろう。

ではあれは昼食のまえに、リスに食べてもらえるようにと置いておいて3つのうちのひとつであろうか？

あのリスの口には合わなかったのかな？

それとも気づかないでそのままあったものを、この子が手に入れたのだろうか？

なかなか話そうとしないところを見ると、好みだったんだろうか？

「その木の実が気に入ったのでしょうか？もしよければ今他にもあるからさしあげます。」

私はこの時、この大きな犬があのだリスを殺してしまったのだとか、傷つけて無理やり奪ったのだとかは不思議と全く考えなかった。ましてや、目の前の自分に何らかの危険となるなんてことも想像になかった。

わたしはバスケットを下すと、残っていた木の実をいくつか取り出して犬の前にそっと置いてみた。

その犬は私の行動に反応したのか、近くにあったわき水のほうにそらしていた顔を勢いよく私のほうにむけた。

そして地面の上の木の実と私の顔を交互に見る。心なしか瞳の輝き

が増しているようだ。

うむ、わたしには動物の表情を見分ける力はないはずだが、喜んでるのだろうか。

尻尾も大きく動いているしな。

「少し硬い実だけれどあなたの丈夫そうな歯なら平気でしょう。さつきは途中であったかわいいいリスにも差し入れようとしたのだけど、振られてしまったんです。

いやじゃなければもらってください。私の家にはまだまだたくさんありますから。私一人では食べきれる自信がないから、悪くしてしまいうんじゃいかと心配してたところなんです。」

つつい真面目に話しかけてしまったけれど、その子は私が話し終えた後、木の実をもらってくれた。

言葉が通じたようであれしくなって、いい気分のまま広げたままのバスケットを片付けようと体を伏せた私の耳に、低くてよく響く声が聞こえてきた。

「ああ、確かにこの木の実は歯ごたえがあるが、それもたまらない。この魔の森の中にある食べ物も美味だとおもっていたが、それ以上だ。

それに先ほどは言葉も返さず失礼なことをした。リスの姿は他の動物がおびえないから重宝しているのだが、まさか魔の森に人の子がいるとは思わなくてな。」

木の実がつかないだ寝物語 3

いつの間にかまた結構な時間が経ってしまったらしい。

わたしがバスケットを閉めようと伸ばした手をそのままに、顔だけあげてこの犬を真正面から見上げたとき、周辺の大きな木の間から覗いた空は茜色に染まっていた。もう日が落ちつつあるのだろう。

「今の声はあなたからですか？ なかなかいい声をしてますね。」
いろいろ思うところはあったが、とりあえずそんなことを言ってみた。

（そもそも動物が話しているけれど、私が知らないだけで普通なのでしょうか？

犬の声帯が人間の言葉が話せる構造になっているとは思いませんでした。

「美味」なんて話しことばで聴くのは初めてです。私も「こどものくせに話すことばが可愛くない」とか言われるけどこの子はそれ以上じゃないでしょうか。）

「ふむ、それはほめてくれているのか？ 数十年前もそう言ってくれた人の子がいたが、面映ゆいな。

それにしてもそなたもなかなか愛らしい声をしている。一人でこの森を散策したり、自分よりも大きな獣に近づいていまだに逃げるそぶりもなかったからな。その見かけにそぐわずなかなか豪胆なものだと思っていたが、声は可愛らしいのだな。それに賢そうな瞳をしている。」

件の犬は先ほど受け取った木の実を足でいじりつつ、大きな体を横たえ、まるで「伏せ」のような体勢で私を見上げる。

その大きな眼を細ませながら続けたのは、やはり時代がかったことばである。

声だけ聴いているとその低い声も相まってかなり年上の大人の男性と話しているような気になる。

犬の年齢はわからないけれど、この子はかなりの時を過ごしてきたのだろうか。

前足やしっぽまで持ち出して木の実らをもてあそぶ様子はまるで仔犬のようだが。

「そんなこと言っていただけるのは光栄です。けれど私はおそらくあなたが思ってくれるほど度胸があるわけでも賢いわけでもないでしょう。」

今も家までの帰り道などわからないですから。」

（声が可愛いなんて初めて言われました。

それにさっきは魔の森とかいう単語が出たけど、本当でしょうか？自宅の庭があ有名な森につながっているとは恥ずかしながら初耳です。

それにあのリスの子が目の前の犬と同じ子とは驚きです。なるほど世の中には不思議な動物がいるものです。）

いつの間にか会話が続けているが、やはり思ったことの半分も口に出せてはいない。自宅にどうすれば帰れるか知らないが、帰ったその時にはもう少し見知らぬ人と話す練習が必要だろうか。

「いや、そんなことはない。この森は自らが認めないものは誰であろうと受け入れないからな。

王族だろうと高名な学者だろうと、たとえ話すことのできない幼子であろうと、気に障る言動をしたものは追い出したり、同じところを何度も回らせていつまでも変わらぬ景色に気がおかしくなるように放置したりしているのだ。

そなたは見たところ、だんだんと森の奥のほうまで進まされていたようだ。きっと森に気に入られたのだろう。」

それなりに遊んで満足したのか、つまんだ木の実を口にはさんでその犬は言葉を続ける。

自分が魔の森に気に入られるような行動をしたとは思えないが、この犬がいうのならそうなのかもしれない。

良いことなのかどうかはわからないが、やはり相手がどのような存在であれ、自分に興味を持って好意をよせてくれるのはありがたいことだろう。

ついつい心の中で森に感謝を述べていると、思わぬ言葉をもらってしまった。

その犬は、顔を心持ちあげて私の来た方向と私の顔を交互に見やると、何かためらっているようにも聞こえる声色で言った。

「ところで帰り道が分からないとのことだが、大丈夫か？そなたと初めに会った場所までなら案内してやれるが、おそらくすでに、そなたの家とつながった森の入口はとじられているはずだ。

魔の森は複数の入口があるが、それらは日が沈むか、月が沈むかしてしまふと、何も通さなくなるからな。

きつと次にそなたの家へ続く入り口が開くのは、明日の日が昇るころになるろう。」

予想もしなかったことを聞かされて少しの間言葉が出てこない。

確かに私は今日一日外で時間をつぶすつもりだったが、さすがに夜になる前に家に戻るつもりだったからだ。

庭にあった、初めてみる木や草花（今ではそれらは魔の森に自生しているものだと分かったわけだが）に夢中になっていてかなりの時間が経ってしまったのだろう。

見上げた空は茜色を通り越して薄闇色になっている。

この犬の言葉が本当だという確証があるわけではないが、この森の生態の不思議さや人の言葉を話す動物の存在、それにこの犬の語る様子を見て、とりあえず今日のうちは我が家に帰れないということにすんなり納得してしまった。

ではどうやって夜を過ごせばよいだろうか。

夜の間だけであるから、少しぐらい飲み食いしなくても死にはしないだろう。それにまだ昼食の残りがたくさんある。

しかし真夜中の時間に森の奥深くで無防備に過ごすこともためられる。

目の前の犬が自分を傷つけることは想像できないが、他に危険な動物がいらないとは限らないだろう。

私は何も身を守る手段はない。

それに、本来これほど大きな動物ならば、人間は怖くてこんなに近距離で向かい合うことさえ難しいだろうというのは自分でも想像できる。

日が昇るまで、ある程度姿を隠せる場所に潜んだほうがよいだろうか。

まあ、どこにそのような場所があるか見当もつかないが。

しかし、明日の朝には森の入口というところにたどり着かなくてはならない。

いくら私が一人で暮らしているとは言え、あまり長い間家を空けることは望ましくはないだろう。

それなら、夜の間に少しでも元来た道をたどっていたほうがよいのだろうか？

ああ、けれど私はすでにその道がわからないじゃないか。

考えるとあまりよい状況ではないことに気がついた。

普段は一人できちんと生活していると思っていたけれど、こんな時は何をすればよいか全くだ。

おそらく私の顔も不安そうな頼り無いものになっていたかもしれない。

私がいろいろ思いめぐらしているあいだ、黒犬はずっと私を見ていたようだ。

不意にそれまで伏せていた体を起こすと、私のほうまで近づいてきた。

私が接近に気付いて黒犬をみると、その犬は心持ち顔を傾けていてくれた。

「そんな顔をするでないよ。今夜は私とともに来ないか？

人の身には不十分かもしれないが、雨風をしのげる場所に案内しよう。帰りのことも大丈夫だ。そなたは明日私が入口まで乗せていこう。」

木の実がつないだ寝物語 4

「そんな顔をするでないよ。今夜は私とともに来ないか？」

人の身には不十分かもしれないが、雨風をしのげる場所に案内しよう。帰りのことも大丈夫だ。そなたは明日私が入口まで乗せていこう。」

言葉は問いかけの形をとっているけれども、その声は私をやさしく説き伏せるようだった。

その言葉は私にはとてもありがたいものだった。体を落ち着ける場所と、帰る術まで提供してくれるというのだから。

この犬を疑う気持ちはなかったし、相手もおそらく好意で言ってくれていることは分かった。

けれど何となく、うなづくことはためらわれた。

さっき会ったばかりの無関係の存在に迷惑をかけてしまう。相手にそのようなことをするメリットはないのだ。

「いえ、そこまでしていただくのは申し訳ありません。

一晩だけのことですから何とかなるでしょう。」

私は口早にそう言って荷物をまとめて去ろうとした。

「こちら、話はまだ終わっていないのだよ。

この森は気に入った人間を故意に傷つけることはしないが、森に生きるものたちが全く危険ではないというわけでもない。

それにそなた元来た道もわからぬのだろうに。」

黒犬はそういつて首を振った。

本当のことを言われて返す言葉もない。それにその言葉はからかう

ようなものでもなく、私を案じていつてくれていることがすぐ察せられるほど柔らかかった。

黙ったままうつむいてしまう私の右手に、黒犬は左足を重ねて続ける。

犬の前足はその大きな体に見合うほど大きく、爪も頑丈そうだった。しかし私は、自分が敵わないだろう相手に対する恐怖や恐れよりも、自分を庇護してくれてくれようとする相手への暖かい気持ちに先に立った。

（もしかしたら、手の甲にふれるふにふにした肉球のやわらかさと温かさのおかげかもしれないが。その感触に、つつい左手も黒犬の足に添えてしまった。）

「幼子^{おひなご}が遠慮しなくてもよいのだよ。

そなたいったいいくつなのだ？

そなたがその年ごろにあわぬほどに、賢くしっかりしてることは分かっている。

けれどまだこれほど小さな手ですべて一人でこなそうとしなくてもよからう？」

黒犬はやさしく続けている。

わたしは自らの手と相手の足のふれあったあたりに視線をやりながら答えた。

「今日でちょうど11歳になりましたよ。

でも歳は関係ないのではないですか？頑張ったらこなせることを人に頼ってばかりではいけないのはどんな場合も同じです。

それにたった一晚のことですから、どうにでもなります。あなたに迷惑はかけられません。」

黒犬は少し笑っているような声で言う。

「おやおや、なかなか強情だな。」

しかし先ほどの言葉は『いつも誰かに頼ってばかり』のものには当てはまるけれどそなたは違うだろう？

それにそなたの言葉を借りれば、私にとっても『一晩だけのことだから、どうにでもなる』のだよ。そなたのことは迷惑でも何でもない。

むしろ珍しい出来事だから歓迎するぞ。近頃退屈していてな。

それにそなたにはうまい木の実ももらったことだ。これくらいのこととはさせておくれ。」

そこまで言うとは少し強引に私をその広い背に乗せ、森のさらに奥のほうまで走り出した。私はあまりの足の速さに、思わず強く犬の首に手を回すが、その首は私の手が回りきらないほどたくましかった。それに私の鼻先に揺れるその長く美しい毛並みは月の光にきらきらして見えた。

本当なら振り落とされるのを心配しなくてはならないほどの速さだろうに、気を使ってくれているのか、体の揺れはそれほどでもなく、むしろその背中の広さと暖かさになぜか安堵さえ覚えた。

あっという間にその場を離れ、何か白い建物の前で背中からおろしてもらったときは、少しさびしく感じたほどだ。

私がきよろきよろと辺りを見回していると、いつのまにか黒犬はその建物の扉らしきところに移動してわたしを見ていた。

「さあ、人の子よこちらに来なさい。すこしさびれてはいるが造りはしっかりしているから、一晩の寢床としては十分だろう。」

木の实がつないだ寝物語 5

黒犬に導かれるまま入ったその建物は、さびれているというほどではなかった。

その建物はあまり見慣れない構造の建物で、ところどころにある彫刻や出入口の上部にある透かし彫りの細工は美しく、今まで街のどの建物でも、本の中でも見たことがないものだった。

しかし、黒犬に先導されて通り抜けたいくつかの部屋のうち、吹き抜けで多くの人が入れそうな大きめの部屋は昔たった一度訪れた王都の大神殿の祈りの間と印象が似ていた気がする。

黒犬が私を最終的に案内したのは、部屋をいくつか抜けたところにある奥まった部屋だった。出入口は一つしかなく、端のほうには木でできた寝台らしきものがあるだけだ。犬はその横で立ち止まると、私と寝台を交互に見やる。

おそらくここで休めということだと思って、私は靴を脱いでそこにあがり、荷物も横に下した。

「今日はそこで横になるとよい。ふむ、やはりこの部屋でも人の子には寒いかもしれんな。」

黒犬は私が少し体を震わせたのを見て、小さな部屋を見回してそう言った。

「少し待ってておくれ。何か持ってこよう」

犬はそこまでというと、出入口からあっという間に出て行ってしまった。

一人残された私は、部屋をぐるりと眺めるが興味をひかれるものはあまりなかった。

本当に何もない部屋のように、私が以前使っていた子供部屋くらいの広さの室内には、出入り口とその上にある透かし細工と、今自分が座っている寝台のほかには何も目立ったものがなかった。寝台は素朴な作りという感想しか抱けなかったので、残った出入り口をじっと見る。

出入り口は大きめに作られており、引き戸などで遮られているわけでもないので常に開けはなしの状態で、かなり風通しが良くなっている。

かなり長身の人でも余裕で通れるだろう出入り口の上の細工を、首をのばしてみていると、あることに気付いた。

「おや？もしかして壁画になっているのでしょうか？」

その細工はおそらく何か動物をかたどっているようで、その動物が成長する様子を描いていることが分かる。

細工は向かって左端に、生まれたばかりだろう幼い姿があり、右側に進むにつれ、その姿が大きくなり、食事をする様子や駆け回る様子が細かく表現されている。

その流れは細工が途切れても続くようで、壁に絵として描かれているようなのだ。

すでに色あせてしまっているようだから詳細は分からないが、壁をよく見るとうっすらと動物のような姿があることが分かった。

「ああ、かなり凝った作りだったのですね。

もしかして他の部屋も同じなのでしょうか？時間があれば見たいところですが……」

けれど今日はもう時間も遅いし、明日はすぐ帰ることになるだろう。またこの場所を訪れることは自分一人では無理だろうから、きっと見ることはできないと思った。

そんなことを考えていると腕にふさふさしたものを感じた。

驚いて横を見ると青の黒犬が私の腕に何か毛布のようなものを押しつけていた。

「ぼんやりとしてどうかしたのか？

私が入ってきてても気づかなかったようだが。」

怪訝そうな声で聞いてくる。首をかしげたその様子は、力いっぱい不思議そうだと訴えている。

「いえ、何でもないんです。

それよりこの毛布は？」

「ああ、この部屋はそなたには寒かろう？これらを使うとよい。少し古いが清潔ではあるはずだ。」

そう言ってそれらの毛布を私の体に巻きつけ始める。

急なことに驚く私にも構わず周囲を回り続け、3枚ほど巻き終わったところで満足げに離れた。

かなり世話焼きなのかもしれない。

「ありがとうございます、すごく助かります。

けど私が使つてよいのですか？あなたは寒くありませんか？」

毛布の隙間から、動きづらい手を駆使してそばにいる黒犬の体をなでながら聞いてみる。

内心毛布を巻きすぎだと思いながらも、世話を焼いてくれたことが

うれしかった。

「大丈夫だ、私は自前の毛皮があるからな。

さあ、もう寝なさい。朝になったら起こそう。」

そういうと黒犬は寝台から下りて、すぐ下の床に体を伏せてしまった。

「わかりました、でももう少し話してもかまいませんか？」

「あつ、もちろんあなたが眠くなったらすぐやめますから！」

すぐそばにいたぬくもりが急になくなったことがなんだか残念で、普段なら言わないようなことを口に出した。

口に出した後で、世話になりながらさらに手間をかける気かと、あわてて言葉を付け加えた。

「ふっ、構わんぞ、もともと私にはさほど睡眠は必要ないのだ。

それに最近退屈だと言っただろう？そなたと話をできるのはありがたい。」

黒犬は声に笑いをにじませながら言葉を返した。

木の実がつかないだ寝物語 6

そう言ってくれた黒犬にうれしくなって、私はたくさんのことを話した。

普段なら、頭の中で考えるだけで決して外には出ず、いずれ消えていただろう思いも言葉にした。

自分でもこんなにしゃべれるとは思わなかったほどだ。

黒犬はそんな私の言葉をまじめに聞いてくれた。

私がこの森の草花の珍しさを語り、ときどき外の植物について気になったことについて黒犬が質問し、私がそれに答えた。

とりとめがなく自分でも何が言いたいかわからないようなことを話した時にも、黒犬は丁寧な相槌を打って最後まで急かさずに聞いてくれた。

黒犬は、この魔の森や自分のことについて私に教えてくれもした。森の入口は複数あって、外のどの場所とつながるかは不定期に変わることを。

それらは二種類あって、日が昇ったところに開いて日が沈むと閉じるものと、月が一番高いところに昇った時に開いて月が沈むと閉じるものがあるそうだ。私を通ったものは前者らしい。

森には貴重な草花や動物がいるから、時々それを目的に入る人間がいること。

この黒犬は、もともと森で生まれたわけではないが、ある時傷つい

て人間に追われたこの森の動物に出くわして、人間を追い払ってや
ってからここに時々訪れては過ごしていること。

たいていの動物ならば、自在に姿を変えられること。

私とリスの姿であったときにあげた木の実は、いままで食べた中で
格別においしかったということ。

いろいろ話すうちに、その黒犬が寝台の下からすまなさそうに言っ
てきた。

「申し訳なかった。初めに会ったときに入口のことを伝えておけば、
今日中には家に帰れただろう。」

おそらく家人もそなたを心配しておろう。

それに今日は誕生日だったのだろうか？人は生まれた日には親しい人
とともに祝うと聞いた。それなのに、このような何もないところで
過ごさせてしまった。」

その言葉に思わず寝台から身を乗り出して黒犬のほうを見ると、犬
は耳を伏せ、尻尾も丸めた姿で私のほうを見ていた。

思ってもみなかったことを言われて固まった私を見て、犬は焦った
ように言葉をつづけた。

「すまない。言い訳になるかもしれないが、最後に人とかかわった
のはかなり前のことで、人間の生活がどのようなものだったかをと
っさに気にかけることができなかったのだ。」

人は、そなたほどの年頃の子が一晩帰らなかったらきつと激しく心
配するものなのだろう？初めにあったときに日暮れまでには森を出
るように言っておけばよかったな……。」

その声が落ち込んだものになったのに気がついて、私は急いで言葉
を返した。

「なにを言っているんですか。」

私が自分の意思で森に入って、この森の性質も知らないのに、帰道もわからなくなるほど奥まで歩いてきたんです。

一晩過ごすことになったのは明らかに私の責任です。

むしろ面倒を見てくれているあなたに感謝しています。」

そう言ってもまだ落ち込んでるので、さらに言葉を続ける。

「それに、我が家には今だれもいませんから、私を心配するような存在もありません。

あばたが気に病む必要はありません。

本当なら父が帰ってきていたはずなので、普段なら訪れるかもしれない叔母夫婦も今日明日は来ないでしょうし。」

そこまで言うと、黒犬は一瞬目を見開いたあと、言葉を発した。

「……そうか。それでも私が気づいていれば、幼子を夜の森で過ごさせることにならなかったのだよ。すまなかった。」

そこまで言うともた体を伏せたので、私もこの話は終わりとばかりに再び横になった。

それからわたしがいろいろとりとめのない話をし、黒犬は相槌を打ち…、いつの間にか私は寝入ってしまったようだ。

そのとき、どこからか「おめでとう」という低い声が聞こえたような気がするが、もしかしたら夢だったのかもしれない。

翌朝私は黒犬の顔に体をゆすられて起きだした。

声を何度かけても起きなかったと教えてくれた黒犬は心なしか苦笑しているように感じられた。

昨日の残りのサンドイッチを朝食代わりに食べ、黒犬にも勧めた。犬はおいしそうに平らげてくれ、私の腕をほめてくれた。

他にも、バスケットの中には父のために作っていたおかずを持ってきたので、それも勧めると、黒犬は複雑そうな様子ながらも腹に収めて、再び料理上手だと感心してくれた。

残っていた木の実はお礼も兼ねてすべて渡しておいた。

空腹を満たした後、黒犬が教えてくれたところによると、もう日がのぼって数時間たったということだ。

黒犬は私が通っただろう入口まで乗せて行ってくれた。

道々、かなりの速さで進みながらも、途切れることなく話を続けた。ほとんどは目にはいいいた草花のことだったが、森について気になることも聞いた。

私の家の周りには、もしかしたら魔の森への入口が他にもあるかもしれないということだ。

黒犬が数十年前に森を訪れたとき、私の祖先らしき人間が同様に迷い込んでおり、しかしその時の入口は今向かっている入り口とは違っていたらしい。

入口は不定期に表れるが、その場所は決まったところらしいから、今も使えるかもしれないとのことだ。

そんな話をしているうちに目的地まで来たらしい。黒犬は私を入口らしきところに下ろす。

「本当に助かりました。それに昨日はいろいろな話をしてくれてあ

りがとう。久しぶりに楽しい時間だった。」

それを聞いて、黒犬は苦笑いの様子だ。

「あれくらいのことは大したことではないぞ。こちらこそごちそうになってしまって悪かった。」

まだ家までは歩くのだろうか？ 気をつけて帰るのだよ。」

「家に帰ったらこの森のことは忘れなさい。それにこの入口はちょっともう使えなくなる時期のようだ。おそらくそなたが通ったらその役目を終えてまた消えるだろう。」

もうお別れかと思うと、この相手とは短い時間しか一緒にいなかったにもかかわらず、さびしく思った。

その気持ちが表情にでも出たのか、黒犬は困った様子でこんなことを言ってきた。

「おやおや、泣かないでくれ。そんな顔を見ると離れがたくなるからね。」

そなたのことを思うなら、あまり人でないものと触れ合うべきではないのだろうか……。」

「そうだね、森への入口をほかにも探してごらん。」

それは確か、月の動きで開くものだったはずだ。

その入り口を見つけた時に、そなたがまだ一人で夜を過ごしていたならば、寂しくなったらそれを通してまた会いにおいで。

私はあいにく話はうまくないが、そなたがその日に見たことや感じたことを聞いてやることくらいはできるだろう……。」

そこまで言うとはんとうに姿が見えなくなってしまった。

私はしばらくそこに立ちすくんだまま、入口があったらしいところ

を見つめた。

そのまま歩を進めるも、このあたりでよく見かける日や草が目に入るだけで、何も変わったことは起きなかった。

木の実がつないだ寝物語 終

私はそれから今までにも増して庭の手入れに力を入れ始めた。

ただし活動時間は月がのぼってからである。

花壇に花の種をまき、伸びすぎた草を刈りながらも、件の入口を探しつづけた。

そんな私の様子に、訪れた叔母家族も、私の誕生日を間違えて覚えていたせいで一月遅れで帰ってきた父親も理由を尋ねてきたが、なんだかんだとごまかして、探索を続けた。

決して一人の夜が怖かったり、厭わしく思ったわけでもないのだが、また会えるならば会いたかった。

あの時から、何か感じた時にそれを伝える相手がそばにいなかったときに抱く思い、それ以外でもふとした時に気付くこの気持ちの寂しさだというのならば、私は入口を探し続ける資格はあるはずだ。この寂しさを、故意ではなくてもわたしに気づかせてしまったのがあの黒犬ならば、ぜひあの犬に責任を取ってもらおうじゃないか。あの犬は、なぜか必要以上に自らに責任をかぶせる性格をしていたようだから、きっとそんなことを言っても、困った顔をしつつも笑ってまた私にうなずいてくれるに違いない。

あの日から結構な月日がたったころ、わたしはこりずに夜中に庭をうろついていた。

かつて荒れ果てていたとはだれも思わないほど、今では我が家の庭はきれいに整えられている。

伸び放題だった草は適度にそろえられているし、花壇には四季の花が季節ごとに庭に彩りを添えている。

放置されていた屋外用の机や椅子も、ぐらぐら揺れないように脚を直してもらった。近頃背が伸びてすっかり男の子らしくなったといこのフィーが、私の危ない手つきを見て申し出てくれたのだ。自分でも、何回やっても余計に傾くだけの椅子を見て、彼に甘えることに決めた。

あの子は今でも私が夜中に庭を徘徊することが気になるらしく、理由をしつこく尋ねたり、危ないからやめておくようにいつてきたりする。

この前は、

「そんなにしたいなら自分も一緒に行くから一人で歩き回るのはやめてくれ」

と訴えてきた。

気持ちはあるがたいのだが、このことは自分一人ではなくてはいけない気がしたので断った。

あの日、黒犬に言われてから、自分一人ではできないことは他の人に手助けしてもらうことを覚えた。シェリーさんにときどき手が回らない家事を手伝ってもらったりもした。はじめて頼んだ時には、シェリーさんは笑いながら、

「そろそろ言い出さなかったら、無理やりにも仕事を奪ってたところよ。」

と言って、喜んで引き受けてくれた。その言葉で彼女に今まで心配させていたことが分かって、申し訳なく思ったものだ。

ただし、この入口探しだけは一人でなしとげたかったのだ。

子供が遠慮をするものじゃないとあの犬は諭してくれたけれど、このことは一人で達成してこそまたあの犬に会いに行ける気がした。

それに、もしかしたら少しおびえていた部分もあったのかもしれない。人に話して、夢でも見たのだろう、嘘をついているのだろうなどと信じてもらえないこと自体は、おそらく何とも思わないという自信はある。

けれど、そう言われた瞬間に、自分でもあのことが夢の中の出来事だったのかもしれないと思いはじめられるかもしれないことが怖かった。

だってあの出来事が実際に会ったことだと証明するものは何もないのだ。

バスケットの中身はきれいに空になっていたけれど、私が自分で食べたことを忘れていたり、庭のどこかに落としてたりしたのかもしれない。

夜中に屋外で一晩過ごしたと仮定すると、その割には翌日に風邪をひいたりはしなかったけれど、私は今まで数えるほどしか体調を崩したことの無い健康優良児だから、証となるようなことでもない。

だから、あの出来事を否定するような危険には近づきたくはなかった。

そのため、フイーに理由を説明することも、一緒に探してもらうことも避けたのだ。

あの子は私を心配してくれたのだろうに、悪いことをしたと思ったものだ。

あの子にお礼も兼ねて好物のパイでも作ってあげよう。父が今でも定期的に送ってくるあの木の実は、お菓子に入れてもおおいしかったので、シェリーさん家族におすそ分けしたところ、たいそう喜ばれた。とくにフイーは力を入れてほめてくれたので、たびたび差し入れをしているのだ。

今日はそのパイを大量に作った後、いところ用に包んだものは残し、残りを夜食用にバスケットに入れてまた庭に繰り出した。今夜は月が明るいので、足元にそれほど注意しなくても大丈夫そうだ。

以前は草が生い茂っていた一画を、できるかぎり細かい歩幅で歩いてみる。どこに入口があるかわからないし、その場所でどんなことをしたら森につながるかもわからないから、自然と動きは細かいものになる。

はたから見たら変な人物にしか見えないだろうが、ここは我が家の庭なので、見る者はいないだろう。

なかなか体力を使って試してみたが今夜も無理なようだ。

明日の夜——細かいことを言えばもう今夜だが——はこの続きからはじめようと思い、家のほうに足を進める。

途中で腹が鳴ったことで、結局夜食を食べなかったことに気付いた。歩き回ったこともあるし、空腹は一度意識すると余計に気になるものでもあるので、自宅に入る前に休憩しようと思い付く。

バスケットを下し、パイを取り出し、ちょうどそばにあった切り株——以前は私の腰ほどの高さだったのに、今では太ももぐらいでしかない。私も思えば大きくなったものだ——に腰を下ろそうとした。

ところがその下ろそうとした腰は、見事に地面に尻もちをついてしまった。痛みに思わず年頃の娘らしからぬ悲鳴を上げる。腰を打った衝撃のため、きつく目もしかめていたようだ。——そして、再び目を開いた時、目の前には耳を伏せたあの黒犬がいた。

私は驚きのあまり、一瞬目も口もこれ以上ないほど丸くなったと思う。

ところが目の前の黒犬はのどかに声をかけてきた。

「おお、久しぶりだな人の子よ。元気そうで何よりだ。けれどいきなり大声をだすのはいただけないぞ。」

伏せていた耳を戻し、私に近づいてくる。

その毛並みは数年前に見たときと変わらず、美しい。

話す様子は落ち着き払ったものだったが、その大きな尻尾はふさふさ揺れているようなので、私との再会を少しは嬉しく思ってくれているのかもしれない。

その姿をよく見たいのに、なぜか輪郭がぼやけてきた。

「大きくなったものだ。髪も伸ばしたのか？よく似合っている。間違えたぞ。」

だが声は変わらないな。相変わらず愛らしい。」

声がだんだん近づいてくる。

けれどその様子は認識することはできない。かろうじて何か黒いものが私に触れそうなところまできたことが分かるだけだ。

せつかく何年振りに会えたのに、私はまだ何も話しかけることができないでいる。

だって口を閉じていないと、娘らしからぬ唸るような鳴咽が出てしまいかもしれない。

私は小さいころから泣かない子だったと父が以前さびしそうに言っていたけれど、ことこの犬のこととなると、その限りではないようだ。

「ああ、また泣かせてしまったか。

やはり私は言葉がうまくないな。できればそなたの笑った顔を見たいのだが……。

そうだ、あの時の建物が近くにあるのだ。まだ夜風は冷えるからな。そちらに行こうか？

実はな、あの中にあった壁画を修復しておいたのだ。そなた名残惜しそうにしておったろう？

それにな、私が美味と思うこの森の果実もためておいたのだ。

ぜひ試してみないか？きっと気に入ってくれると思うのだが……」

泣いた私を見て黒犬が一生懸命に話しかけてくる。食べ物につられると思われたのは少々心外だが、その気持ちがとてもうれしかった。

そのしきりにこちらを気遣う黒犬の様子に、やはりあの日は夢ではなかったのだと確信し、今までの数年は無駄ではなかったと思った。

「いいえ、これは悲しくて出てきた涙ではないですから。

うれしくても人間は泣いてしまうんですよ。ほら、もう私笑っているでしょう？」

私は黒犬に体を預けながら言った。

そして手に持ったままの木の実のパイを差し出す。

「ぜひご相伴にあずかりたいのですが、私もあなたに食べてもらいたいものがあるんです。

あの時の木の実を使ったお菓子なんです。いただいてくれませんか？」

私の台詞に、黒犬は私の顔とパイを見比べながら、嬉しそうに言った。

「おお、いいにおいがするな。喜んでいただこう。

ただとりあえず移動してからだ。体が震えておるぞ。

まだ月が沈むまでには時がある。

こらこら、少し腕の力を緩めておくれ。

そんなに首をきつくしめなくてもわたしは逃げたりはせんよ。」

黒犬はいつかと同じように、私を自分の背に乗せて走り出した。

その足はとても速かったけれど、もちろん私は振り落とされる心配などしなかった。

遠目にあの懐かしい建物が見えてきたころ、私は黒犬の耳元でつぶやいた。

「逃げないというのは本当ですか？」

では一晩じゅう寝ないで私につきあってもらいます。

あなたに話したいことが、数年分たまっているものですから。」
そしてそれを聞いた黒犬は、また笑ってうなずいてくれたのだ。

眠気が襲ってくる前に

最近あいつの様子がおかしい。

ベッドに入り、眠気が襲ってくるまでの間、俺は近頃の出来事を思い返していた。

あいつとはいとこであるリアのことだ。
いやに上機嫌だったり、そう思えば急に深く考え込むような顔になったりする。

何かあったのかと聞いてみれば、その時初めてこちらの存在に気付いたとでもいうように驚いた顔をして、そのあとあわてて否定する。

今日なんかは、こっちが重ねて問い詰めようとしたときに、激しく首を振った後に奥に逃げようとしたが、その時、何もないのにつまずいて腰を打ってしまった。

その時に一緒にこぼした紅茶が、あいつの気に入りだというスカートにこぼれてしまったため、あわてて洗いに行ったので話はうやむやになってしまったが、あんな場面であんな反応をしたら、何かあるってことはばれだろう。

他にも気になることがある。

あいつはかなりの料理好きで、ほぼ一人暮らしといっているのにも関わらず毎日かなり凝った料理を作る。

自分で新しい料理を考えて作るのも好きらしく、たまに俺の母親がレシピを教わって我が家の食卓にも乗ったりする。

そんなあいつはいつからか菓子にも手を伸ばし始めたようで、もとからこちらにも才能があったのか、ぐんぐん上達し、今ではかなりの腕前だと評判らしい。

それほど料理や菓子に詳しいわけではないが、確かにあいつの作った菓子はうまいと思う。

俺は菓子は好きだが、甘すぎるものが苦手だと知ってから、それほど甘味が強くないものを選んで我が家に差し入れてくれるようになった。

特にすばらしいのはカスタードパイだろう。

何か木の実が入っているらしく、歯ごたえがありながらも控えめな甘さがして、街で一番人気だという洋菓子よりもうまかった。

学校の子に誘われて食べに行ったそのパイは、もちろんうまかったはうまかった。

けれど、過剰なデコレーションやあとをひく甘さのせいかな、また食べたいとは思わなかった。

普段から、おれの好みに合わせた味付けや工夫をしてくれるリアの菓子を食べ慣れているせいかもしれないが。

俺が甘い物好きときいて、わざわざ誘ってくれた子には申し訳ないが、また来ないかという誘いには遠慮してしまった。

それほど俺の心をあのパイはとらえたのだ。

それ以来、おれが絶賛したのが効いたのか、リアはたびたび作っては差し入れてくれていた。

材料に欠かせないらしい木の実は、研究で頻繁に家を空けるおじさんが、旅先から大量に送ってきたものらしい。

菓子や料理にかなりの量を使ってもまだ余裕があるのだと、以前あいつから聞いた覚えがある。

そう、それなのにそのパイをあいつは最近、おれにくれなくなったのだ。

あいつの家の台所の様子をみると、菓子作りは相変わらず続けているようだし、実際にその様子も見た。

ある午後、久しぶりに家を訪ねたとき、ちょうど例のパイが焼きあがったところだった。

あいつの料理好きを思えば、そんなことは珍しいことではないが、そのあとがおかしかった。

今まではたいてい出来上がったその菓子や料理をそのまま勧めてく

れたのに、その時は別の作り置き菓子テーブルに乗せたのだ。もちろんその菓子もおいしく頂いたが、それは今は重要ではない。

もちろん、そのパイがもととも誰かにあげる予定で作ったものだったとかならば納得できるが、それにしてもその作った量は半端ではなかった。

普段は十分なスペースのある台所に所狭しと並べられていたのだ。それに、積み重なっていたはずのあの木の実の減り具合からみて、もっと作っている可能性もある。

まだあやしい点はある。

あいつはここ最近、今まで俺や母さんがどれだけ言ってもやめなかった夜の散策をやめたようなのだ。

まあ、たまに朝方眠そうにしていることはあるが。

けれど、少なくとも、夜中に庭中をうろついて雑草を引っっこ抜いて回ったり、かなりの高さのある木にのぼって飛び降りたりといった行動にはもう出ていないのだろう——初めてみたときは目を疑ったものだ——、そういった行動に出た次の日には、手や足に土カスや草が残っていたはずだけれど最近はないから、間違っていないと思う。

あのおとなしそうで頑固ないとは、その行動について、自分たちがどれだけやめるように言っても聞かなかったし、その理由を聞い

てもなんだかんだとごまかして決して言おうとはしなかった。
それなのに突然行動が変わったことが、おれは不思議に思えてしょうがない。

あいつに何があったんだ…。

そんなことを長々と考えていると、覚えのある眠気がやってきた。
まだまだ不審な点はあるのに、これ以上は頭が回らない…。

それでもなんとか頭をひねってみる。

一連の出来事はすべてつい最近起こったことだから、きっと関係があるんだろう…。

ああでも、ここ最近よく見る思案顔も、どこに消えるのか謎のパイについても、おれの疑念は尽きないけれど、一番の疑問はやはり庭歩きについてだろうか。

今度会ったらまた問い詰めてみようか。

一体お前に何が起きたんだと。

けれど、またあいつはごまかすかもしれないな。

それならそれでいいんだろう。

いつも少しだけ辛そうな、そして悲しそうな顔をしていたあいつだが、近頃はそうでもないのだから。

何かうれしいことがあったような、楽しいことがもうすぐあるからそれが待ちきれないとでもいうような表情をしているから。

あいつにとって決してこの変化は悪いことではないのだろう、そうであってほしいなと、緩やかに眠りに落ちながら俺はそんなことを思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5803p/>

犬とわたしの寝物語

2010年12月26日07時39分発行